宮澤賢治センター通信

（岩手大学内）

（題　字／金森由利子）

第 14 号

発 行 人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目３番５号
電話 019－621－6672
FAX 019－621－6493
宮澤賢治センター（岩手大学内）
発行責任者　岡田幸助

目 次

●巻頭言　代表挨拶……1
●定例研究会の概要……2～6
●トピックス……5
●「ミニ・茶話会」便り…7・8
●賢治と音楽の会便り……8・9
●エッセイ……9
●宮澤賢治記念短歌会報告……10
●第5回宮澤賢治学生短歌大会報告…11～13
●特別寄稿……13～15

巻頭言

賢治センターに感謝

宮澤賢治センター代表　岡田幸助

平成18年6月に宮澤賢治センター（岩手大学内）が発足しました。「どなたもどうかお入りください〈賢治への関心〉それだけが条件です。」このキャッチフレーズに引かれて、私は入会しました。当時、岩手大学ミュージアム館長を務めていた私はなんとか岩手大学らしさを、地域や全国に広めたいという思いで一杯でした。岩手大学ゆかりの人物として宮澤賢治は避けて通れません。「賢治のことをもっと知りたい」その思いだけで時間の許す限り例会に出席しました。元々、文学には全く音痴の私にとって定例研究会で聞く話は新鮮で、賢治の思想にも強く惹かれました。

平成18年11月1日から30日まで岩手大学ミュージアムで「賢治得業論文展」を開きました。過去に岩手日報社主催で1回だけ展示されたこと以外に、今まで世の中に公開されることのなかった賢治の得業論文の全ページを写真に撮っていただき、ミュージアム本館の第2展示室に展示しました。「我が荒涼たる洪積不良土　砕石工場技師への道程」と亀井茂先生に賢治の得業論文について11月7日に講演していただきました。論文の実物を見て、賢治は引用文献をきちんとあげ、丁寧な文字で書き上げ、最後にまず所属教室の古川教授に、次いで関教授に謝辞を述べている態度に感動を覚えました。

平成19年9月27日の第14回定例研究会で「キャンパス内で賢治を探索」と題して話題の提供をいたしました。賢治研究にはずぶの素人である私がお話を担当するのは元々無理な話でしたが、ミュージアム館長として知り得た学内の名所を紹介しました。「アザリア」に「盛岡高等農林学校に来ましたならば、まず標本室を観せてから植物園で苺でもごちそうしようではありませんか」の「標本室」は現在の「動物の病気標本室」の前身であり、「植物園」は現在の教育学部の裏にある「自然観察園」であることを紹介しました。講演後のご指摘で、自然観察園に設置されている石碑に焼き付けられた保阪嘉内の「阪」の字が「坂」と間違っていることに、このとき初めて気がつきました。

平成20年6月26日、私はその器ではないのですが望月善次代表に代わって宮澤賢治センター代表に就任しました。総会に続いて記念パーティーが開催され、賢治への熱い思いで、話題も尽きることなく楽しい時を持ちました。

平成20年7月20日に経埋ムベキ山としての姫神山の登山に参加しました。この登山は日頃ほとんど運動をしたことのない私にとって大きな挑戦でした。登山靴を購入して、登山の1週間前から足慣らしに早朝の散歩を始めました。早朝の散歩はそれ以来現在も継続しており、賢治も歩いて調査した自宅周辺の滝沢村鵜飼の景色を楽しんでいます。

その後、岩手山、南昌山や種山ヶ原にも登りましたが、賢治の足跡を体験する良い機会になりました。それまでどの山が南昌山かさえも分かりませんでしたが、今では散歩ごとにはっきりと南昌山を認識することができ、今日は雨が降るとか降らないとか言っています。天気の良い日には早池峰山も臨むことができて、賢治の世界を満喫しています。

平成20年10月18日、山梨県韮崎で賢治の親友である保阪嘉内のふるさとで「保阪嘉内　宮澤賢治　花園農村の碑」碑前祭が開催され、岩手大学宮澤賢治センター代表として出席しました。12月5日には、次男の庸夫氏が岩手大学に来てくださり、「杜陵の二春秋　嘉内と賢治の盛岡高農時代」と題して講演をいただきました。そしてこの講演会は翌年6月1日から19日まで岩手大学60周年記念行事として開催された大イベント「アザリアの咲くとき～宮澤賢治と学友たち～」展に繋がりました。

この行事を機会に栃木県さくら市（旧氏家）の小菅健吉、鳥取県倉吉市の河本義行（緑石）の関係者とも交流を深め、全国における岩手大学の立場を認識させられました。当時の情報メディアセンター長の大塚尚寛副学長、佐藤金壽課長に心から感謝いたします。このイベントの成功は展示会場となった図書館のギャラリーに「アザリアギャラリー」としてその名前が付けられ末永く残ることになりました。

平成22年3月に岩手大学を定

年退職し、その5月22日に「賢治と音楽を楽しむ会」2周年記念行事としてオペラ「ポラーノの広場」DVD鑑賞会を開催しました。これは賢治の親友の一人である河本義行（緑石）のふるさとで上演された作品で鳥取県でのアザリアの仲間の顕彰活動のすばらしさを味わうことができました。この音楽鑑賞会は姉歯武司氏のお世話で農学部附属植物園の一隅にある百年記念館において毎月開かれている行事で、名古屋から新幹線で毎月参加してくださる方もあり、賢治の聞いたであろう曲をすばらしい環境の中で楽しんでいます。

平成23年6月24日から7月24日まで独立行政法人産業技術総合研究所フェローの加藤碩一先生、地質標本館元館長の青木正博先生の協力のもと、「関豊大郎と宮澤賢治　賢治が学んだ72の石たち」展では賢治が手に取って眺めたであろう宝石のように美しい石の数々を展示することができました。両先生には石のクリーニングから写真撮影までしていただき、岩手大学に眠るお宝の価値を再認識しました。

私は平成24年3月末から1年間、南米ウルグアイ共和国大学に獣医病理学の支援で参ります。ここで私は宮澤賢治センターの代表を退任し、次期代表として鈴木幸一教授に就任をお願いしました。先生は蚕のご専門で、宮澤賢治についても造詣の深い方であります。3月9日から「蚕」の企画展を予定しています。宮澤賢治センターは岩手大学のシンボルでもありますす。これまで望月善次前代表を始め賢治センターの皆様にご指導をいただいたことを感謝し、今後、特に学生諸君の参加を得て、宮澤賢治センターが鈴木幸一代表、石田紘子副代表、佐藤竜一事務局長のもとでますます発展するよう祈っています。

定例研究会の概要

第58回　11月17日（木）

▽**会　場**　農学部1号館第1会議室

▽**講　師**　岩手大学教育学部教授　大野　眞男氏

▽**演　題**　「柳田国男と宮沢賢治」

▽**司　会**　池田　成一

参会者　25名。

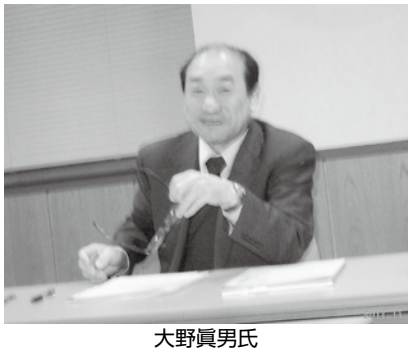
宮沢賢治と柳田国男を結ぶ人物として先ず忘れてはならない人物に佐々木喜善がいます。遠野物語の素材を柳田に語って聞かせた人ですね。今日の話の本題ではないのですが、喜善も賢治と交流のあったことに触れておきましょう。既に昔話収集家として名をなした喜善は、実は賢治と同様にエスペランチストでありました。昭和七年に花巻でエス語の講習会を開いた折り、病床にあった賢治を訪ねたことをきっかけに交流が始まったそうです。賢治は詩集を、喜善は自ら主宰する雑誌『民間伝承』を送りあい、賢治は方言による民話に心惹かれ、すっかり二人は意気投合したエピソードが、『日本のグリム―佐々木喜善』（遠野市立博物館特別展図録）の中で石井正己氏により紹介されています。出会った翌年九月に賢治は亡くなりますが、賢治の死の八日後に喜善も亡くなります。奇しき二人の縁（えにし）を感じてしまいます。

さて、以上は石井氏の受け売り話ですが、これからは本題に入ることにしましょう。私の専門は日本語学ですので、言葉の観点から賢治にアプローチしてきました。賢治作品の中で使われる方言表記については『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂）の一項目として書かせていただきましたが、なぜ作品中で方言を使うのだろうということは漠然とした考えしか持っていませんでした。今回、このことを柳田国男を関連づけてお話ししてみたいと思います。方言の問題を通じて二人を結びつけることは強引かもしれませんが、第一次大戦後の世界情勢の大きな変動が二人に共通の舞台を与えたというのが最も言いたいところです。

日本語が近代化されたのは明治時代でした。文部省のもとに置かれた国語調査委員会が標準語を策定し、明治三十年から四十年代にかけて全国の学校で標準語による国語教育が組織的に推進されていったことは、標準語励行運動とか方言撲滅運動といった言葉で皆さんもよくご存じでしょう。何故そこまで苛烈に国語の教育が行われたかというと、国語を共有することで日本の国民を強く相互に結びつけて国家の安定を図ろうとする言語政策がとられていたことがあります。当時の日本の国語づくりのモデルはドイツ帝国などのヨーロッパの諸帝国にありました。

戦前の国語教育に政策レベルで関わった保科孝一という国語学者は、多くの民族や言語が割拠する地域を支配するドイツ帝国やオーストリア・ハンガリー帝国の崩壊について、国家語教育の不徹底が一因であるとし、「民族の統一上から見ると言語が統一を失して分裂していくことはなにより危険である」と述べています（『国語政策』1936）。海外に新領土を抱えた日本もヨーロッパ諸帝国と同様の国家語政策を必要としており、当時の国語統一は必ずしも内地の方言のみを対象としていたわけではないのです。

このような国語政策に対して柳田国男は終始批判的な姿勢を示していたことはよく知られています。柳田が言語問題に重大な関心を持つようになったのは国際連盟委任統治委員として大



大野眞男氏

正十年から三年間ジュネーヴに滞在したことがきっかけとなったといわれています。当時の国際社会での公用語はフランス語か英語であって、国際連盟の諸会議で言語弱者としての立場を柳田はいやというほど味わったに違いありません。

帰国後は排外主義的な国語観を抱くようになったことは、例えば「国語の管理者ー某高等学校の弁論部において」（昭和二年）の中で、「日本ほど自分の国語を冷遇虐待した国も珍しい。日本ほど外国語に従順であつた国も無いかと思ふ。言語だけからいふと昔は支那の属国、今は英国の属領であつても、これ以上の奉公は為し得られなかつたらうと思ふ。」と述べていることでもよくわかります。同じ年の論説「国語純化運動」にも、「言語（話し言葉の謂い）はすべてのものの根本となるものである。従って、言葉を純化することは今日の日本に於いて最も緊要とする運動である。それには先ず方言の運動から初めなければならぬ。」とあり、同じく同年に発表され日本語方言研究の金字塔とされている『蝸牛考』が単なる言語研究ではなく、国語純化の思想背景を持っていたことを見落とすことはできません。

苦いジュネーヴ体験ばかりが柳田の国語純化論に影響を与えたのはありませんでした。むしろ直接に第一次大戦後の欧州情勢から強い影響を彼に与えた人物がありました。東洋語学者であったG.J.ラムステットは、フィンランド独立後、初代駐日公使として大正九年から九年間日本に滞在し、公使活動の傍らエスペラント普及活動やフィンランド文化の紹介活動を展開しました。彼の残した『フィンランド初代公使滞日見聞録』には、独立間もないフィンランドの国語づくりを目指した方言調査を紹介した講演会に柳田が出席し、講演に触発されて柳田が「蟻」や「蜘蛛」に関する方言研究を開始した旨が記されています。

柳田が一方的にラムステットの講演から影響を受けたものかどうか検証することはできないものの、柳田にも後日（昭和十年）の講演「フィンランドの学問」の中で、ラムステットから聞き知った知識としてフィン語による国語づくりについて述べられています。六百年以上スウェーデン王国とロシア帝国に支配されていたこと、その間の公用語はスウェーデン語であったこと、独立前後からようやく母語であるフィン語が国語に位置づいたこと、しかし標準フィン語はまだ無いこと、フィン語諸方言を調査研究してフィン語辞書を作りつつあること、それを踏まえて標準化を進めているが決して性急ではないこと。そして、「日本で方言訛語と称して、何でもかでも都府以外に行はれて居る言葉を、全部生煮えの漢語などとさし替へさせやうとしたのとは、心掛けに於て大分の相違があるやうである。」と返す刀で日本の国語政策を批判しています。

宮沢賢治を近代文学史に位置づけるのが難しいことをしばしば耳にしますが、柳田国男と宮沢賢治が実のところ同時代人であって、同じ時代の空気を吸って生きた時期があったことはエスペラント体験の共有のみが物語るものではありません。賢治もフィンランド人ラムステットに東京国際クラブの講演会で出会い、第一次大戦後の新しい世界の風を感じ取っていたことは、父政次郎宛の書簡（大正十二年）により周知のことです。この書簡は、「やっぱり著述はエスペラントによるのが一番だ」とラムステットに言われて賢治のエス語熱がいよいよ焚き付けられたことでよく知られていますが、ここでは別の側面に注目したいと思います。

ラムステットの講演が「尽く物質文明を排して新しい農民の文化を建てるといふ風の話で」あったこと、講演後に「早速出掛けて行って農民の問題特にも方言を如何にするかの問題を尋ねましたら、向ふも椅子から立っていろいろ話して呉れました。」とあり、その具体的な談話内容には触れられていないものの、二人の会話がエス語に限られたものでないことは明瞭です。フィンランドの民族運動の端緒となったレンリョート編『カレワラ』も、そもそも地方の農民が炉辺で断片的に節を付けて語り伝えてきた伝説・譚詩の類でした。また、出会いに先立ち賢治も「農民芸術概論要綱」を示しており、賢治が影響を受けたというよりも、ラムステットを通して垣間見た大戦後の北欧の世界と響き合うところが大きかったという方が正確かもしれません。

宮沢賢治、柳田国男が教育を受けた明治期の国家そして国語のモデルは、多くの民族・言語を包摂した強大な帝国がしのぎを削る第一次大戦前のヨーロッパにありました。しかし、大正期には第一次大戦を契機としてロシア革命をはじめ実に多くの新しい展開が世界中で起こりました。かつては強大な帝国の下で支配されていた多くの民族が国家として独立する国民国家時代の到来とともに、フィンランドも国語づくりを手がけ始め、その風をラムステットはもたらします。

柳田は、漢語と洋語に対する排外的姿勢をもって民俗（族）的地盤からの日本の国語づくりを志向します。賢治の受けとめ方は、民俗的傾向は柳田あるいは佐々木喜善と共通するものの、日本国のあり方には関心がありませんし、西洋語に対する排外的姿勢も見られません。中央日本語に方言を対峙させることと併せて、イーハトーヴ地域の固有性をエスペラント由来の地名・人名を使った脚色で近代日本から異化することによって、地方の視座から価値の中央一元化に異論を唱えたと言えるのではないでしょうか。その際に、大戦後のヨーロッパを含めた国民国家づくりの世界的うねりが彼らの時代的背景にあったと想像されます。

（大野　眞男　記）

第59回　12月8日(木)

▽**会　場**　農学部1号館第1会議室
▽**講　師**　長崎大学名誉教授　東　幹夫氏
▽**演　題**「宮沢賢治評価をめぐる覚え書」
▽**司　会**　岡田　幸助
参会者　26名。

東　幹夫氏

三三年間暮らした長崎から雫石へ移住し、それ以前と比べて圧倒的に高い宮沢賢治（以下、賢治）の情報密度を感じてきた。そのなかで私が気になったのは、賢治への崇拝と神格化の問題であった。そこで賢治の実像に迫りたいとの思いから、「賢治像」形成と賢治評価をめぐる経緯をひととおり学んでおこうと考えた。その過程で知りえた管見の一端を話題提供した。

賢治の遺稿類整理編集に携わった宮沢清六（以下、敬称略）と賢治を発見・激賞し、没後の追悼と全集刊行を担った草野心平という「賢治像」形成に決定的役割を果たした二人に加え、一九二八年から四〇年まで岩手日報社で学芸欄の紙面をかなり自由に操ることができ、草野らに賢治についての知識を伝えた森荘已池の役割は極めて大きかった。草野は、賢治没後すばやく谷川徹三や中央の詩人・作家たちに賢治の偉大さを紹介し、宮沢家の資金援助の下で「賢治追悼」（一九三四）を発行し、全集刊行計画、販売促進のために「賢治友の会」を発足させる。「雨ニモマケズ」（一九三二）の流布と文部省推薦「風の又三郎」の映画化（一九四〇）などの中央ルートと、清六や森の地方ルートが協力しあって「賢治像」形成が進捗した。岩手日報と盛岡放送局などが全集の宣伝に努めたほか、高村光太郎揮毫になる「雨ニモマケズ」詩碑が羅須地人協会跡に建立され、一九三六年除幕式、三八年詩碑拓本作成、四三年「文学遺跡の顕彰」と四四年岩手日報による拓本広告などによって、偉人賢治が創造された。詩碑に刻まれた詩は国民的詩章として賛仰愛誦され、滅私奉公に通じる詩として、青年を戦争へと鼓舞する「青年朗詠集」に掲載され、国策的にも利用された。戦後一九四七年には国語教科書にも登場し、現在でもこの詩は多種多様に引用されている（三・一一東日本大震災でも）。

なお、「賢治像」形成過程については、米村みゆき（二〇〇三）「宮沢賢治を創った男たち」を参照した。

「雨ニモマケズ」が一一月三日（天長節）に書かれたことを最初に強調し重視したのは谷川（一九四四）であったが、小倉豊文（一九七八）は天長節の日の制作は偶然であって、谷川の絶讃は贔屓の引き倒しだと厳しく批判した。一方、第二〇回賢治賞「宮沢賢治読者論」の著者西田良子（二〇一〇）は、「昭和六年一一月三日」という日付は、その時点における賢治の身体的・宗教的・社会的条件や当時の心境を視野に入れて読んでこそ、一つ一つのことばにこめられた賢治の謙虚な反省や必死の祈りが正しく理解できる、とのべている。明治天皇誕生日を明治節とする運動の発案者田中智学は制定を祝して「一年の魂とせよ明治節」という標語をつくり、国柱会の「天業民報」で大々的に宣伝しており、国柱会会員で読者でもあった賢治は当然この標語を知っていた筈だと西田はいう。

この詩をめぐる谷川と中村稔（一九五五）の「雨ニモマケズ」論争（一九六三）は代表的な賢治評価論争だが、西田は読者論の立場から、谷川の共感的理解と中村の批判的分析という対立する評価として捉えており、私も共感することができた。

羅須地人協会時代の賢治が農業技術や肥料設計だけして、日本資本主義との地主小作関係や民主的改革を看過したと批判する国分一太郎（一九五五）や中村（一九六二）に対して、当時の稗貫郡内の地主小作地所有状況・階級関係から、賢治がそれを看過したことはあり得ないし事実でもないと名須川溢男（一九六七）は反論した。かれの賢治と労農党との関係についての聞き取り調査による実証的な一連の研究（一九七〇～九七）は注目すべきである。しかし労農党のみならず、その前の牧民会や啄木会との関係も無視されるか（故意に）隠されてきた。名須川（一九七〇）は、それが戦前そして戦後も「賢治神格化に不都合なことであり、近現代史研究や地方史研究の盲点であろう」とのべている。賢治と国柱会との関係にもタブー視の嫌いがありそうだ。

羅須地人協会の「羅須」について、服部文男（二〇〇八）は、賢治が一九二一年頃秋田の「種蒔く人」を知り、その雑誌名の副題La Semanto（ラ・セマント）の「種蒔き」の前に「土を耕す」ことが必要と考え、これに相当するエスペラントを求めて、rasti（ラスティ耕す）を探し当て、「耕す人」を秋田の例にならってLa Rastanto（ラ・ラスタント）としたが、「危険な言語」を用いて社会主義的という疑いをかけられるのを避けるために、あえてエスペラント語としては不正確な「ラスチ人」から不可解な文字「羅須」を当て「地人」協会としたのではないか、との説を唱えた。

服部文男先生追悼集「思想の巨人を偲ぶ」（二〇〇八）の早坂啓造「服部文男先生と賢治研究」では、岩大賢治センター月例会（二〇〇六・七）で「森に隠された三陸アワビ騒動」を報告した松元季久代の基本的立場が、「賢治研究に社会科学の視点を」という服部が繰り返し強調した問題提起と重なることが紹介されている。

（東　幹夫　記）

第60回　2月16日(木)

▽会　場　農学部1号館第1会議室
▽講　師　岩手大学人文社会科学部准教授　中里　まき子氏
▽演　題　「死者を想うとき：宮沢賢治と高村光太郎の挽歌」
▽司　会　山本　昭彦
参会者　31名。

中里まき子氏

高村光太郎の「レモン哀歌」（一九三九年）が、宮沢賢治の挽歌の影響のもとに書かれたことは、意外と知られていないかもしれない。

妹のひとりであるトシが一九二二年十一月に二十四歳の若さで早世すると、その直後に賢治は三篇の挽歌―「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」―を創作した。「永訣の朝」では、「あめゆじゆとてちてけんじや（雨雪を取ってきてください）」というトシの願いに、詩人は外へ飛び出して松の枝に積もった雪を集め、二椀分を瀕死の妹に与える。

死の床にある愛する人に「さいごのたべもの」を与えるというこの身振りは、十数年後に「レモン哀歌」の詩人によって反復される。光太郎は、死に際の妻にレモンを差し出すのである。レモンを「がりりと噛」む智恵子は、賢治が「松の針」で描いた、松の枝に「頬を刺させ」て「むさぼるやうにさえする」トシの再来であるようにも思われる。他にも、鉱物のイメージ（「ふたきれのみかげせきざい」と「トパアズいろの香気」）や、死別の場面を支配する明るさ等、共通点を探せばきりがない。

果たして光太郎は、賢治の挽歌に触発されずして、「レモン哀歌」を書きえただろうか。光太郎は、全集編纂や詩碑建立に尽力するほどに敬愛していた賢治の挽歌を読み返しながら、来るべき妻の死に備えていたのではないだろうか。

ところが、上述の符号性にも関わらず、二人の作品は截然と異なっている。まず、「レモン哀歌」は実に見事に構成されている。光太郎の挽歌が賢治の挽歌よりも完成度の面で優れているように思われるとすれば、それはおそらくこの作品が現実の場面を物語ってはいないからである。複数の研究者が指摘するように、この詩では、現実の出

トピックス

2011年（平成23年）11月26日（土曜日）　北海道新聞（夕刊）

編集委員報告

福田 淳一

宮沢賢治の代表作

「雨ニモマケズ」震災機に再び光

東日本大震災を機に、宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」に光が当たっている。書かれた（昭和8年）3月、病床で（昭和8年）9月、震災の被害は一瞬で数百万人の命を奪う。震災後、宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」を朗読…

「人の役に立ちたい」思い結晶

病床からの祈りと願い

賢治をしのぶ人々が訪れる花巻市の宮沢賢治記念館＝今年9月

略歴　1896年（明治29年）8月、現在の岩手県花巻市で質屋・古着商の家に生まれる。盛岡中学、盛岡高等農林学校を卒業。その後、稗貫（ひえぬき）農学校（後の花巻農学校）の教師となった。農学校を4年ほどで退職し、農民のための私塾「羅須地人（らすちじん）協会」を設立。1933年（昭和8年）9月、急性肺炎により37歳で死去。

来事に基づいて構築された、ある虚構の場面が提示される。まず、光太郎は智恵子の「青く澄んだ眼」に触れているが、彼女の眼が本当に青く澄んでいたとは考え難い。また、詩の末尾に「写真の前に挿した桜」とあるが、智恵子が亡くなった一九三八年十月からこの詩が書かれた翌年二月までの四ヶ月間に、桜が咲いた時期はなかったはずである。

「レモン哀歌」の末尾で、詩人は、いつものように妻の遺影の前にレモンを供えると言っている。これは、すでに智恵子の死を受け入れた光太郎の姿であるように思われる。つまり彼は、四ヶ月に及ぶ喪の作業の末、現実の出来事を虚構の文学作品として昇華できる状態に至ったときにはじめて、詩作に挑んだのである。

それに対して賢治の挽歌については、まず、どのような状況下で創作されたかが判然とせず、謎に包まれている。「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」において、トシはまだ死んではいない。しかし、賢治がこの三篇を彼女の存命中に書いたと考えるのは難しい。また、この三篇には、トシが亡くなった一九二二年十一月二十七日の日付が付されているが、本当に賢治がこれらの挽歌を死の当日に書き上げたと考えることも同様に難しく思われる。この謎をめぐっては現在までに複数の解釈が提示されている。草野心平は、この三篇があくまでトシの永眠の日に、「少なくともその骨子は書かれた」と推測し、そこから、「賢治が詩鬼の鋭い爪につきさされていた」という見方を導く。一方、加藤繁生は、賢治が十一月二十九日に営まれたトシの葬儀に、宗旨の相違を理由に参加しなかったことに着目し、その葬儀の時間こそが三篇の挽歌を書くためのものであったと考える。いずれにせよ賢治の挽歌は、喪の作業のただ中にある若者が、心境を率直に綴った言葉なのである。

光太郎が、これほどまでに創作スタイルの異なる賢治に傾倒した背後には、賢治が最愛の人の死を経験していたことが決定的な要因として潜んでいたのではないだろうか。というのも、光太郎は、智恵子が自殺を試みて、その後病状が悪化する時期（一九三三年から一九三八年）に、賢治への崇敬を深めていくのである。そのことを検証するために、二人の詩人の交流における重要な出来事を辿ってみたい。

一九二二年十一月に妹トシが夭逝すると、賢治は多数の挽歌を創作し、それらを収録した『春と修羅』を一九二四年に自費出版する。その後一九二六年に賢治は光太郎を東京のアトリエに訪ねる。それは二人が実際に会った唯一の機会であったが、挨拶のみで別れる。その日光太郎は非常に多忙であったと言われている。この束の間の対面が何を意味するかを開示するような資料や証言は存在しないが、このときの光太郎は賢治に対して、まだそれほど強い愛着を持ってはいなかったように思われる。一九二六年の時点では、賢治は地方の小都市から出てきた無名の青年にすぎない。それに対し、高村光雲の息子であり賢治より十三歳年長の光太郎は、すでにある程度の名声を築いていた。

光太郎は、賢治の詩が自分にとってどのような意味を持つかを、智恵子が他界する一九三八年に向けて、徐々に理解していったようである。それは光太郎自身の言葉によって裏付けられる。賢治の死の翌年、一九三四年に発表した「宮沢賢治に就いて」において、光太郎は、「彼［賢治］の死後、いろいろの遺稿を目にし、またその日常の行蔵を耳にすると、その詩篇の由来する所が遥かに遠く深い事を痛感する」と述べている。この証言は、光太郎の賢治への興味と敬愛心が、賢治の死後により一層増大したことを物語っている。

ところで、賢治が没した一九三三年は、前年にアダリン自殺を試みて未遂に終わった智恵子の病状が悪化する年でもある。賢治の死を悼む光太郎が、賢治をフランスの画家セザンヌに比較しながら「コスモスの所持者」と称えた文章は、「私は今或る身辺の事情のため是以上書いてゐる時間がない」と結ばれる。「或る身辺の事情」とはまさしく智恵子の病気を指すものと考えられる。賢治が没して光太郎が賢治への敬慕を募らせる数年間は、智恵子の病状が悪化する時期でもあった。

一九三八年三月の評論文「宮沢賢治の詩」において光太郎は、賢治の「永訣の朝」と「松の針」を書き写しながら涙を流したと書いている。この涙はどこから来たのだろう。おそらく彼は、トシの死と重ねながら、目前に迫った智恵子の死を想っていた。賢治の挽歌に触発された光太郎は、同年十月に死の床にある妻に最後の食べ物であるレモンを差し出し、その四ヶ月後に「レモン哀歌」を創作する。

一九二六年の出会いのとき、光太郎は、やがて賢治とその詩とを崇拝するようになることを、おそらく知らなかった。しかしだからといって、光太郎に先見の明がなかったということにはならない。ある文学作品の価値は決して絶対的なものではなく、それは読み手の精神状態に応じて変わるものである。二人の詩人の交流は、文学と人生とが取り結ぶそうした関係を示唆していると考えられる。

（中里　まき子　記）

「ミニ・茶話会」便り
―一茶一話―

茶話会は定例会終了後、小会議室で小1時間講師を囲みお茶とお菓子を頂きながら、人によってはビールを飲みながら、講師へ講義への質問や自身の考えなど忌憚の無い話し合いが自由におこなえる十分に楽しめる場です。今回もまたその様子をお伝えいたします。

○　宮沢賢治と柳田国男という二人（共通の友人は佐々木喜善）を通し、明治期の国家形成時に於ける各地の方言を、国内で意志の疎通ができる普遍性、共通性を持った標準語（国家語）をつくるまでの経緯と二人の方言に対する思いの部分を改めて学びました。標準語は本江戸の山の手言葉を中心に、参勤交代で各国の方言が行き交うなかで育まれた言葉が中心だったようで、必ずしも江戸言葉ではなかったようです。またそのなかで、共通語としてのエスペラント語に二人とも関心を持ったと言う事は大変興味深い事です。それには、フィンランドの日本初代公使を務めたラムステットと二人とも出会いが有り、エスペラント語に対する会話が有ったようです。また、新渡戸稲造も世界共通語としてエスペラント語の使用を推進した事も興味を引きました。エスペラント語はユダヤ人のザメンホフが考案した人工国際語で、意志の疎通をはかり国際平和を目指したといわれております。

現在はグローバル化の時代で世界的に英語が共通語化しており、子供時代から学ぶ事もされておりますが、言語学者の中には「人の思考は言語でなされる。その言語でその国特有の文化も伝えられている。その言語が変化する事は、思考形式も変わり文化そのものに変化を起こす。所謂、日本人のアイデンティティーの崩壊に通ずる。」との意見も有り、明治期の国内的問題が現在は世界規模で起きていることを注視して行かなければとの思いを強くしました。

○　賢治の評価を巡る話、それもどちらかと言えばマイナスイメージというあまり今まで定例会では話題にならなかった〝話題〟でした。講師は賢治の〝聖人化〟や〝個人崇拝〟があまりに進んでいるのでは、と言う思いで関連書を探ったようです。谷川徹三と中村稔のいわゆる〝「雨ニモマケズ」論争〟での中村稔の「賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたらぬ作品のひとつ」とか、西田良子の「宮沢賢治読者論」、米村みゆきの「宮沢賢治を創った男たち」、服部文男の「宮沢賢治と『羅須地人協会』」等の諸作品がありその紹介でした。この講演を聴き最初は戸惑う思いの話でしたが、こういう観点も大事と思われました。

○　「宮澤賢治」と「高村光太郎」を最大に理解した妹「トシ」と妻「智恵子」、その二人の女性の「挽歌」ともいえる作品を並び比べて、二人の人間像を浮き上がらせたユニークな視点からの講演に聞き入りました。

二人の接点は１９２６年賢治が光太郎宅を訪ねた時、光太郎から見れば年齢も一回り違い、また、当時は無名の賢治に対して既に名声のある光太郎の評価も有り、多忙という事で一見しただけで話もしないで終わったようです。しかし、光太郎は賢治没後徐々に賢治への評価を高めて行き、「宮沢賢治に就いて」「コスモスの所持者宮沢賢治」等発表しました。

あらためて二人の〝死者を想う〟作品、「永訣の朝」「松の針」と「レモン哀歌」を並べてみると、二人の性格や作品に対する態度が現れています。それは光太郎的表現をすれば、賢治は〝自身のコスモス（自然現象的肉体そのもの）〟を表しているのに対して、光太郎は〝人の死の瞬間を文学者として描いた〟と言う事です。光太郎は彫刻家の常として〝完成したもの〟しか表出しない姿勢で「レモン哀歌」を文学作品として取り組み、賢治は自身の思いをストレートに出す違いとも思われ、好き嫌いは有るとしても、読む人の心底に訴える力は賢治作品が大きいと思います。また二人に共通し、多くの作者に影響力を与える女性の持つ内的世界の豊かさも話題になりました。

茶話会では賢治の作品はもとより日本人の作品は主語が無く、海外では非常に不思議がられ、多くは翻訳できないと言われるそうです。主語が無くても通じる日本語の不思議さも話題になりました。西欧には一神教のキリスト教の「God」と「我」の二者の関係から、必ず「我」が出てくる文明観が有り、日本的多神教の国は必ずしも主語が無くも、或は全てが主語たりうる文明観があると言われ、面白い論議になりました。

ユングの分析心理学から言えれば、「自我」＝「Ego」であり、その深層の無意識世界を尋ねると〝全体世界〟に通じる「自己」＝「Self」があると言われます。また別の言葉で言えば「Self」＝「宇宙意志」とも言え、仏教的に言えば「Ego」＝「小我」に対して「Self」＝「大我」とも言えます。光太郎が表現する賢治の〝コスモス〟という〝全体世界〟から出てくる作品が、人々の無意識に共感・共振を起こし感動を呼ぶのかと思います。賢治が信仰した法華経、特に日蓮仏法の中には唯識思想が含まれ、「六識」（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識）までの意識世界より、深層の「七識」（末那識）、「八識」（阿頼耶識）、「九識」（阿摩羅識）等のいわゆる、無意識世界を説いていますが、賢治の作品にはその無意識世界に通ずる作品が多いと言われ、それぞれ読者の無意識世界に働きかけているのかもわか

りません。

特に世界各国で東日本大震災の追悼の集会のおり、賢治の作品が紹介され多くの会場で「雨ニモマケズ」が朗読され感動を呼んだそうです。特に日本語での朗読にも大勢の拍手があり、日本語の響きと賢治の思いが重なり皆さんの共感を呼ぶのかとも考えました。

尚、蛇足ですが２０１１年11月iTunes及びカナダのiTunesチャート・ワールドミュージック1位獲得と20カ国以上で〝ピンク・マルティーニと由紀さおりのコラボ「１９６９」〟が世界的大ヒットとなりました。ＮＨＫの「クローズアップ現代」で大ヒットの原因を取り上げておりました。ヒットの原因として日本語の母音の多さ、母音の響きと1小節に入る英語の単語数の多さに比べ、日本語の単語数の少なさ、従ってそこに思いを込めた語句の使い方が、「浮世絵を見るようだ」とか「落ち着く」とかの評になっているとの解説でした。賢治は盛岡高等農林時代短歌を多く作っていますが、その短い文に入れる〝思いの込め〟かたが、その後の作品に生きているのでしょうか。

（姉歯武司　記）

賢治と音楽の会便り

◎　12月3日いつもの通り14時から「賢治と音楽を楽しむ会」を開催しました。今回はリクエストによりシベリウスを聴きました。賢治さんは良くシベリウスの「フィンランディア」を聴いていたと言われておりますし、復興元年を目指す岩手として不屈の「フィンランディア」を聴きたいと思いました。

最初にシベリウスの「交響曲第2番」を聴きました。シベリウスは交響曲を7曲書いていますが、「第2番」が一番ポピュラーといわれています。独特のロマンチシズム、フィンランドの国名の基と言われるフィン族と幾度となく他国（スウェーデンやロシアほか）に占領された歴史を持ち、それが独特の文化性や民族性を醸し出し、それらが濃厚に出ている曲と言われています。特に第4楽章のはじめのロマンチックな、映画音楽にも使われた曲を楽しみました。

また、「悲しいワルツ」と「フィンランディア」を聴きました。

特に、「フィンランディア」は国民音楽の典型とされ、この曲は国民に圧倒的に愛され、第2の国歌ともいわれ独立心を鼓舞するとの事から、当時のロシアから演奏禁止を受けた事も有りました。この曲を聴き「負けない岩手」「不屈の岩手」を感じて参りたいと思いました。

◎　新年に入り、1月21日東日本大震災から丁度２００年前モスクワの戦いでナポレオン軍を撃破した不屈のロシア軍の勝利をたたえ〝音の記念碑〟としてチャイコフスキーが作曲した序曲「１８１２年」を聴きました。昨年の「フィンランディア」に続き、不屈の岩手の象徴といたしたいと思いました。

序曲「１８１２年」は作曲者チャイコフスキーの郷土ロシアに対する愛や誇りをうたった曲で、標題音楽の代表作と言われております。この中に、平和なロシア、攻め込むナポレオン軍、反撃するロシア軍、そして勝利するロシア軍を音楽で描写し、特に聴いたＣＤは祝砲部分を太鼓でなく、実際の大砲をならし録音したＣＤで響きが特に印象的でした。

また、シューベルトの「交響曲第九番」を聴きました。これは出版元では「第七番」とも言われております。この曲はシューベルト没後11年経って残された膨大な楽譜を整理していたシューマンが発見し、それを初演したのがメンデルスゾーンと言う曰くのある曲です。別名〝ザ・グレート〟とも言われ、〝天国的な長さ〟とも〝天国的な美しさ〟とも言われております。長さの点では4小節の繰り返しで、8小節行ってまた復唱する等の点を言うのではないかと言われています。

特に、今回聴いたＣＤは68年前のライブ録音で音は悪いのですが、爆撃下でのベルリンで、フルトベングラーとベルリンフィルが演奏したものです。当時のソ連が押収し、幻の名盤として西側で求められていたものです。演奏は今回が最後の演奏会の覚悟でなされたとの事で、独特の臨場感、リズム感を味わいました。

また、いつも名古屋から参加して頂いている楢原幹雄さんが丁度1年前の「賢治と音楽を楽しむ会」に参加する予定で、前日の「定例会」から参加して頂いておりました。

昨年の3月11日が「音楽を楽しむ会」当日で、参加しようとしていた当日の模様やその後数日の様子を聞いておりましたが、記録としても是非残しておきたいと思い書いて頂きました。特に盛岡在住の人は自身の事で精一杯の点も有り、市内での様子、特に旅行者の方々がどんな様子であったかを知る面でも貴重な証言と思いましたのでお願いしました。宜しく御願いします。

（姉歯武司　記）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あれからもう一年経った。3月11日　私は盛岡駅前のホテルの8階に居た。その時、部屋が小船のように揺れた。テレビが使えないし、エレベーターも使えないので、所在なくベッドに寝そべっていた。

しばらくすると、部屋から出るようにフロントから連絡があった。非常階段を使って一階まで降りた。雪が降っていて、階段はつるつるであった。夜になり、電気も水道も使えなかった。電話もつながらなかった。当然レストランは閉店していた。自動販売機も使えなかった。パソコンも使えなかった。一番つらかったのは、酒が飲めないことであった。

その夜はホテルのロビーで過ごした。3月12日　ホテルのロビーからも追い出された。駅も店も閉鎖されていた。バスも運行していなかった。一部のコンビニは開店していたが、長い行列が出来ており、商品はあらかた売り切れていた。

盛岡市中をシューベルトの冬の旅さながらにさまよった末、紺屋町の菊の司（酒屋）に転がりこんだ。付近で開店している店はここだけで、ひっきりなし

に客がきた。容器を持ってきた人には水が無料で配られていた。その日は岩手大学で「賢治と音楽を楽しむ会」に出席する予定であったが、岩手大学も閉鎖されていたので、私は店の猫を相手に終日酒を飲んでいた。

その夜は、盛岡駅前の避難所代わりのバスの中で過ごした。外を歩いている時、あたりが真っ暗だったために、何か硬いものに足のすねをぶつけて怪我をした。酔っていたせいもあるだろう。軽症だったが、治癒するのに数ヶ月を要した。骨折しなくてほんとによかった。

3月13日　東北線及び東北新幹線が不通なので、ＪＲの采配により岩手→秋田→山形→新潟→東京→名古屋と迂回・乗り継ぎして帰った。

最後に李白の詩で締めくくる。

世に処ること 大夢の若し 胡為（なんす）れぞ 其の生を労するや 所以（ゆえ）に終日酔い頽然（たいぜん）として前楹（ぜんえい）に臥 覚めて来たって庭前を眄（なが）むれば 一鳥花間に鳴く 借問す 此れ何れの時ぞ 春風流鶯に語る 之に感じて歎息せんと欲す 酒に対して還た自ら傾く 浩歌して明月待ち 曲尽きて已に情を忘る　（楢原幹雄　記）

エッセイ

啄木・賢治と作家願望

岩手大学大学教育総合センター
佐藤竜一

生前思うように原稿料を稼げずに終わった啄木と賢治だが、ふたりとも強烈な作家願望を抱いていた。

啄木が作家を志すのは、渋民村（現盛岡市玉山区渋民）の尋常高等小学校で代用教員をしていたときだ。

寸暇を惜しみ小説を書くようになった啄木が意識したのは、新進作家として台頭してきた夏目漱石と島崎藤村だった。明治39（１９０６）年に書かれた「渋民日記」にこうある。

近刊の小説類も大抵読んだ。夏目漱石、島崎藤村二氏だけ、学殖ある新作家だから注目に値する。アトは皆駄目、夏目氏は驚くべき文才を持つて居る。しかし「偉大」がない。島崎氏も充分望みがある。「破戒」が確かに群を抜いて居る。しかし天才ではない。革命の健児ではない。

やがて、啄木は詩作を休み、小説に打ち込むことになる。「渋民日記」にはこう記されている。

この十日許の間、予は徹夜すること数回、さらでも毎夜二番鶏が鳴いて障子が白んでから二時間か三時間しか眠らない。それで可成学校にも出た。尤も欠勤して書いた事もある。

啄木がこの頃執筆したのは「雲は天才である」「面影」などである。勤務先の小学校を休んでまで、小説の執筆に熱中していたことがわかる。この年、夏目漱石の『坊っちゃん』、島崎藤村の『破戒』が刊行されている。このふたりの作家に対するライバル心が啄木の原動力となった。

作家になりたいという願望はその後も抱いており、北海道での記者生活を切り上げ、上京するきっかけともなった。

だが、書いた小説が金になることもあったが、生活するにはほど遠く、啄木は盛岡中学校の先輩佐藤北江の紹介で得た東京朝日新聞の校正係としての仕事で生活費を稼ぐことになる。

小説家として評価されることはなく、啄木は歌人として名を残した。

もっとも、啄木が生きた明治時代はまだ、作家を職業とするのは困難だった。雑誌社や新聞社に籍を置いて小説を書くというのがふつうのスタイルだった。たとえば、夏目漱石は朝日新聞の小説記者として、小説を発表していたのである。大正時代になると、菊池寛に代表されるような職業作家が輩出してくる。

そういった時代背景の中で、賢治にも作家願望があった。大正８（１９２１）年7月13日付、従弟の関徳弥に宛てたこんな手紙が残っている。

私は書いたものを売らうと折角してゐます。それは不真面目だとか真面目だとか云って下さるな。愉快な愉快な人生です。

（中略）

図書館へ行って見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を借りやうとしてゐます。なるほど書く丈けなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ぢたりしてゐるとお思ひですか。どんな顔もして居りません。

賢治の意気軒高とした、気分が伝わってくる。文学に開眼した賢治は当時、つかれたように原稿を書いていた。一月に原稿用紙で三千枚書いたという、伝説めいた話も残っている。

島田清次郎は当時の流行作家で、１８９９年生まれと賢治より３歳若く、『地上』がベストセラーになった。賢治は家出して東京で生活していた。無名の家出青年の賢治は、島田清次郎に対して軽い嫉妬心を覚えたのかもしれない。

その頃は児童文学の揺籃期で、鈴木三重吉が主宰する童話童謡雑誌『赤い鳥』に有島武郎、菊池寛などが童話を書いていた。童話作家として世に出る道が開かれはじめていた。

職業作家を目指し一心不乱に童話を書いた賢治は弟の清六や友人の菊池武雄を介して原稿の売り込みをしたが、採用には至らなかった。

生涯に賢治が原稿料をもらったのはたったの一度、『愛国婦人』に掲載された「雪渡り」に対する５円だけだった。

現在の貨幣価値でいえば、およそ１万円しか原稿で稼げなかった賢治は、無名作家のまま生涯を閉じたのである。

宮澤賢治記念短歌会報告

今年度十一月・十二月・一月の短歌会を中心として

会員　北田まゆみ

宮沢賢治記念短歌会は毎月一回、主に土曜日の午前に農学部百年記念館二階にて開催されています。主宰である盛岡大学学長の望月先生が多忙な日々の中、何とかスケジュール調整をとりながら、続けてくださってることに感謝しつつ、毎回和やかな雰囲気の中で会員それぞれが自作の短歌を持ち寄り披露し、鑑賞しています。

今回十四号では昨年十一月、十二月、そして今年一月の短歌会のようすと皆さんの自作短歌をご紹介してゆきたいと思います。昨年十一月二十三日の短歌会は佐藤静子さんの担当で、先生のミニ講義は、翌月十二月十日に開催される「宮澤賢治学生短歌大会」に投稿してくださった短歌、数首についての鑑賞が行われました。また歌会の短歌は全部で五十首が集りました。この時点で震災から八ヶ月を経てはいたとは言え、まだあの震災の傷跡が生々しく脳裏に刻まれている中、望月先生の震災を詠んだ歌「東日本大地震・・・幻の声」十首には迫力があり、強烈な印象を受けました。決して風化させてはならぬとの思いに駆られたことでした。そして十二月は百年記念館二階において「第五回宮澤賢治学生短歌大会」の表彰式が行われ、事前に私達記念短歌会のメンバーも微力ながら一次選歌をさせて頂くとともに、当日の会場準備などをとり行いました。

また選者として第一線でご活躍の歌人、仙台市在住の佐藤通雅氏と当日出席し入賞者一人一人に心のこもった感想を述べて下さった歌人の文屋亮氏、主宰である望月善次先生の三人が、素晴しい入賞作品を選ばれました。選者の方々のお言葉や岡田幸助センター長のご挨拶は子ども達にとって大きな励みとなったことと思います。投稿は遠くは広島県の福山市からもあり、小中学生の純真なまなざしで詠んだ短歌は、新鮮で教えられることもあり感動させられました。

また今年一月二十八日の短歌会では北田まゆみの担当でメンバーの短歌三十八首、望月先生の詞書付き短歌「問うことなかれ」連作二十首が集りました。ミニ講義では宮澤賢治の短歌「青びとのながれ」連作十首が紹介されました。大正七年五月以降の短歌群の中に収められています。一首目の〔あゝこはこれ　いづちの河のけしきぞや　人と死びとと　むれながれたり〕に始まり〔あたまのみ　ひとをはなれて　はぎしりし　白きながれを　よぎり行くなり〕で終わる十首ですが、何ともオドロオドロしい凄惨なイメージの短歌です。晩年に作られた文語詩「ながれたり」には右の短歌十首のイメージが下敷きになっているようです。弟の清六氏の「兄のトランク」によると、生前の賢治がイギリス海岸で沢山の死人が流れていくという夢のような話をたびたび聞いたし、賢治が画いた沢山の死人が流れている大きな墨絵があり、相当な力作であったが、すぐに破棄されたと記しています。望月先生はこれらの資料を提示しながら、基本的には農芸化学を専門とする理系の賢治のこうした感覚について、宗教観の問題なども含めた賢治短歌についてお話ししてくださいました。

それでは今回も十一月と今年一月の短歌作品の中から、会員皆さんの短歌二首をご紹介します。

姉歯武司

・我が人生自身の色合い出しつくすオンリーワンの出色（いろ）で散りたし

・叢雲（むらくも）を割き一筋の陽光が田老の地域（まち）を照らす早朝

阿部真紀子

・コスモスとむくげヒマワリ肩並べ夏の出口と秋の入り口

・氷雪を着けた庭木に初日差し穏やかな年義父の墓参へ

小菅アイ

・わが前に座れる人を観察す如何に生きしや電車に思う

・摺り足で凍れる路をこはごはの我を追越す子らの靴音

三木与志夫（望月善次）

〔被災された方とそうでなかった人との差異は、運命としかいいようがない。〕

・生き残ってしまった者の責任をこの人もこの人の言葉で紡ぐ

〔記憶の上に水を注ぐ人がいた。〕

・その意味を問うことなかれひたすらに白きおゆびの水を注げり

北田まゆみ

・わが胸を焦がし焦がして夕焼けの妖しきまでにくれないの色

・あぁ息をしてるのですね私（わたくし）の耳にかそけき囁きありて

佐藤静子

・Ｔｏｋｉｏにも大きな夕陽沈むんだこの道駈けて追いかけようか

・韻律を探しあぐねて我が脳はうつらうつらと冬日を籠もる

田村依江

・落ち葉掃く箒の先に風が舞う集めし落ち葉散らして舞いつ

・放射能帰る自然はありしかと身を震わせて悲しき祈り

吉田直美

・朝ごとに煮出して含む苦さこそ腎臓に効くそはキササゲと

・「ご不便を」その一言で多大なる不便はいつしか日常となる

2011年12月10日

第5回宮澤賢治学生短歌大会報告

盛岡大学学長　望月善次

第5回学生短歌大会は、昨年に引き続き「宮澤賢治記念短歌会」が主宰した。今回は300名を超える応募があった。選考は、仙台市在住の歌人佐藤通雅氏と洋野町在住の歌人文屋亮氏と筆者（望月善次）とで行った（なお、宮澤賢治記念短歌会のメンバーにも選をお願いして、入賞者を決定する参考資料とさせてもらった）。

表彰式は12月10日（土）午前10時から、宮澤賢治記念短歌会メンバーの準備・進行のもとに百年記念館で行った。受賞者や父兄、主宰者の37人が参加した。

参加者

岡田代表の挨拶、実行委員長である筆者の挨拶の後、表彰に入り、本大会の特徴でもある「それぞれの作品に即した評入り」の表彰状が文屋亮選考委員によって読み上げられ、岡田代表による賞状・賞品の授与が行われた。さらに、文屋選考委員による講評があり、閉会後、記念撮影をして散会した。

入賞作品と贈った表彰状の内容は以下の通り。

最優秀賞

なぜだろう　賢治の伝記　読んでいて　辛さ悲しさばかりが残る

（佐々木貴弘　花巻市立大迫小学校　4年）

★辛さ悲しさばかりが作者の中に残ったのは、賢治の苦しみに深く共感できたからではないでしょうか。宮澤賢治の心に深く思いを寄せたとき、美しいだけではない賢治作品の魅力に作者はきっと気付いたことでしょう。同時にこの短歌も読む人に何かを残す作品になりました。

優秀賞

「必死」って　「必ず死ぬ」と　書くんだね　約束守る　熊の心か

（清水慎太郎　花巻市立大迫小学校　4年）

★「必死」という言葉への洞察に、はっとさせられました。人間は、なめとこ山のくまのように命を賭けて約束を守れるか、という問いを突きつける鋭い作品です。

復興を早くと願う人々の銀河鉄道思いをのせて

（阿部幾実　紫波町立紫波第三中学校　1年）

★やさしい言葉で時事問題にも触れた作品です。銀河鉄道は死者を乗せて走る列車でもあります。東日本大震災で失われたたくさんの魂への鎮魂の思いが、まるで祈りのようにこの作品に込められ、胸を打つ作品になりました。

入選

光る山きらきら波打ち「海だべが」その感覚は心を揺らす

（根子友作　花巻市立西南中学校　1年）

★賢治作品の中に何度も出てくる光の表現。そのうち、山が光って海のように見えるというところに作者は目を留めました。心が揺らされた驚きをこの作品は上手に歌い上げています。

月の夜しろうとかんこ呼ばれたよ私のチャンスはあぁあと一年

（丹野美優　花巻市立大迫小学校　4年）

★童話「雪渡り」を踏まえた作品ですね。登場人物の「四郎とかん子」は、「十二歳以下」の条件がある狐の幻燈会に呼ばれたのでしたね。結句の「あぁあと一年」は、「あぁ」を上手に使って、短歌の形に収めていることにも感心しました。

まんまるの　どんぐりのセリフ　読んだとき　弟のことを　思い出したよ

（桐田歩美　花巻市立大迫小学校　4年）

★「どんぐりとやまねこ」のどんぐりたちの勝手気ままなおしゃべりに、おもわず弟さんを思い出したのですね。なかよしきょうだいの姿が思わず目に浮かび、短歌を読む人たちも幸せにしてくれる作品になりました。

星めぐり　今日も双子は奏でます　銀河のような祈りの歌を

（及川波月　花巻市立西南中学校　1年）

★「銀河のような祈りの歌」という表現が美しく、ふたごのお星さまの世界をみごとに表現しています。物語の世界へ知らないうちにいざなってくれる、詩的な短歌作品になりました。

虐十の　林が残されてるように　ぼくのガラクタ　捨てないでママ

（齊田快斗　花巻市立大迫小学校　4年）

★人は利益を生み出すものばかりではなく、形のないものによっても生かされ支えられている。ガラクタにも大切なものが宿っているのでしょうね。この作品は無形のものへの思いを気付かせてくれ、大切なものが何かを考えさせる力を持っています。

夜になる　電信柱　歩き出す　ぞくっと震え　おびえるわたし

（島帆佳　花巻市立花巻小学校　6年）

★夜になると電信柱が歩き出すという賢治の物語。驚かされ、怖いと思った瞬間の心を、見事に一首の作品に封じ込めています。自分の実感をリアルに歌って手ごたえのある作品になりました。

どうどうと　風を吹かせた　又三郎　寒がりな人　怒るだろうな

（細川未悠　花巻市立花巻小学校　3年）

★短歌の中には発見が必要です。又三郎は超自然的存在ですが、この作品では、そこに寒がりな人を登場させ、「怒るだろうな」と想像することでぐっと親しみが増しました。賢治の世界をより身近に感じさせてくれる作品です。

空歌い草木がおどり地が笑う風の旅人ここにあらわる

（平賀百香　花巻市立西南中学校　1年）

★宮澤賢治の想像力には、みんなが驚かされますね。百香さんが言うように「空が歌い、草木が踊り、地が笑い」、「風の旅人」が現れて「宮澤賢治の世界」になるのですが、そのことを短歌として上手に纏めてみせましたね。

ぼくだって　尊敬されてみたいから　バカにされても笑っていよう

（小野僚馬　花巻市立大迫小学校　4年）

★「笑い」というのは、人間に特徴的な行動ですね。その理由を「尊敬されてみたいから」と挙げられると、「バカにされても笑っていよう」というのが、素直に納得できるように思います。それだけ上手に仕上げたのですね。

山猫の　目から離れていくほどに　普通に戻る　ぼくとどんぐり

（藤原桃華　花巻市立大迫小学校　4年）

★宮澤賢治の世界へは、山猫、それも「目」によって引き込まれるのですね。その「目」から離れれば離れるほどに、「ぼくとどんぐり」は「普通の世界」、「現実の世界」に引き戻されるのですね。なるほど、なるほどと感心しましたよ。

学校賞

花巻市立大迫小学校

四年生全員二十七名の作品だそうですね。選ばせてもらった作品もそうでないものも「粒ぞろい」で、選ばせてもらうのに苦労したほどでした。宮澤賢治と短歌に一層親しんでもらうことを願いながら学校賞を送り、みなさんの前途を祈りたいと思います。

宮澤賢治の短歌を作って

花巻市立大迫小学校

四年　**佐々木貴弘**

大迫小学校の四年生みんなで、宮澤賢治の短歌作りに挑戦しました。賢治の作った物語や詩、賢治の伝記などを読んで、自分が心に残ったことについて短歌を作ることになりました。

佐々木貴弘君

ぼくは賢治の伝記を読んで感じたことを短歌にしてみようと思い、取り組みました。

宮澤賢治の作った有名な作品には、「セロ弾きのゴーシュ」や「銀河鉄道の夜」、「どんぐりと山猫」などたくさんありますが、ぼくはたくさんある賢治の作品の中で「注文の多い料理店」が一番好きです。山猫軒に入っていった猟師達が、指示されるまま、靴や服を脱いだり、体に塩やクリームなどをぬったりしながらお店の奥に入っていくところが面白かったからです。

今回、宮澤賢治の伝記を読んで、妹が亡くなったことや、病気になったことなどを初めて知りました。賢治の人生には、何だか辛いことや悲しいことばかりだなあと思いました。そう考えると、「注文の多い料理店」は、面白い話だと思っていたけれど、賢治の伝記を読んだ後には、賢治は辛い中でこの面白い話を作ったのかなと考え、不思議な気持ちになりました。

他にも、宮澤賢治は亡くなってから有名になったということや、賢治が亡くなってから「雨ニモマケズ」の詩が見つかったということもわかりました。生きているうちに賢治の作品がみんなに読まれていたら、少しは幸せな気持ちになれたかもしれないと、胸の奥がまたしんみりしました。

最優秀賞に選ばれたと聞いたときは、すごくびっくりしたけれど、とてもうれしかったです。これからも、賢治の作品をたくさん読んでみたいです。

宮澤賢治の短歌を作って思ったこと・感じたこと

花巻市立大迫小学校

四年　**清水慎太郎**

賢治の短歌大会で、優秀賞になったということを聞いて、ぼくはすごくびっくりしました。まさか自分が賞をもらえるなんて思ってもいなかったからです。

表彰式に行く途中の車の中では、

「自分の手で賞状をもらえるんだ！」

と考えたら、とってもどきどきしました。でも、半分はうれしかったです。

ぼくは、「なめとこ山の熊」を題材にして、短歌を作りました。何で「なめとこ山の熊」を選んだかというと、先生がいくつか物語を読んでくれた中で、なめとこ山の熊と男のやり取りがとても印象的で、ずっと心に残っていたからです。

たくさんのお話を聞き、「なめとこ山の熊」のような作品をたくさん作った宮澤賢治さんはすごいなと思いました。そして、これをきっかけに、宮澤賢治さんの作品や伝記、そして宮澤賢治さんの家族について、もう少し本を読んで知りたいと思いました。様々読んでみたら、宮澤賢治さんは、三十代後半で病気で死んでしまったとわかりました。しかもその病気は、昔は治らなかったけれど、今なら治せる病気だと知り、若いうちに死んでしまった賢治さんは、とてもかわいそうだと思いました。

今回学習して、宮澤賢治さんについて少し詳しくなったので、これからも賢治さんのことを調べたり、読んだことのないお話なども読んだりしたいです。

賢治の思い・賢治への思いを短歌にのせて

花巻市立大迫小学校
教諭　畠山　奈子

東日本大震災から約一カ月、まだまだ心がそわそわしている中で、平成二十三年度の始業式が行われた。今年担任することになった大迫小学校の四年生は、全部で二十七名。どの子も元気いっぱいの、明るく楽しい四年生である。無事に始業式を迎えられたことに感謝をしながら、間違いなく特別な一年になるであろう四年生の一年間を、みんなでがんばっていこうと決意して、一学期がスタートした。

機会があるごとに、みんなで震災のことを思い出した。その中で、宮沢賢治と震災のことを話したことがある。賢治が生まれた四日後に大地震があったこと、亡くなる半年ほど前には三陸沿岸を大津波が襲ったことなどを話すと、ほとんどの子がそんなことがあったのだと初めて知ったようで、とても驚いていた。それから興味を持って、すすんで賢治作品の読書をしたり、読み聞かせを聞いたりしながら、賢治の思いに触れていった。ある時には、賢治の伝記も読んでみた。賢治の生涯には、こんなにも苦しさや悩みがいっぱいに詰まっていたのかと思うと、賢治作品の切ない話はさらに切なく、面白い話ですらどこか悲しげに読めてしまう気もした。四年生の子どもたちは、それぞれの気持ちを作品の中で行き来させながら、賢治に寄り添っていった。

そんな自分達の思いや、各々が捉えた賢治の心を、短歌に表してみようということになった。感想はたくさんあっても、それを五七五七七で表すのはなかなか難しい。自分の持った感想の中から言葉を選び抜き、加えたり切り取ったりを繰り返して、短歌の形にしていった。出来上がった短歌は、どれも作った子の思いが詰まった、個性豊かな作品となった。普段は感想文を書くことの方が断然多いわけであるが、短歌はこんなに少ない文字数でも、読めばたくさんのことが考えられたり伝わったりするのだということに、子どもたちは大変感動していた。そして、自分の作った短歌がずいぶんと気に入ったようだった。

それらの作品が今回たくさんの賞をいただいたことは、子どもたちにとって今後の励みになるとてもうれしいニュースだった。自分の作品が賞に入らなかった子も、仲間がたくさん入賞したことを自分のことのように喜んでいたし、学校賞について、「選ぶのが大変なぐらい粒ぞろいだった」という評価をいただいたことも、ずいぶんと自信になったようだ。短歌という手段で自分の思いや考えを表現するという体験ができたことや、賢治の思いにちょっとでも近づくことができたことなど、今回は大変貴重な経験をさせていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。今後もさらに子どもたちと共に、様々な経験を重ねていきたい。

受賞者

特別寄稿

『やまなし』―クラムボンはかぷかぷわらったよ私考―

宮澤賢治センター会員　宇佐美　怜子

賢治の童話でヤマナシを知って以来、ヤマナシに会うのが秋の楽しみの一つになりました。花巻の吉田忠先生がお送り下さった童話村近くのヤマナシは西洋梨のような形、宮沢賢治記念館への坂を登った所の実は丸い形で、大きさは直径2センチ位からもっと大きいのもありました。辞書によると、『牧野新日本植物図鑑』(北隆館)には「おおずみ（やまなし、やまりんご）」の一項しか記されていませんが『日本植物方言集成(八坂書房)』の方言名索引〈やまなし〉の項には、アズキナシ、イワナシ、ウラジロノキ、オオウラジロノキ、カマツカ、ザイフリボク、シマサルナシ、ズミ、ナシ、ナツハゼ、ネジキ、マメナシ、ヤマナラシ、ヤマボウシと、たくさんの記載があります。

賢治童話『やまなし』に登場する十二月のヤマナシの特定に議論が分かれます。厳寒の十二月には主役の沢蟹も冬眠の時期でありましょう。物語後半の題は最初の「十一月」から「十二月」に変更されたものです。題名変更は、季節を先に送ることで実際の光景ではないことを明示したのではないかと考えます。

前半の「五月」にも議論される言葉があります。「『クラムボンはわらつたよ。』『クラムボンはかぷかぷわらつたよ。』（略）つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぽつぽつぽつとつゞけて五六粒泡を吐きました。」という文中の、「クラムボン」、「かぷかぷ」、「わらった」等についてです。クラムボンという言葉は、クラブ（蟹）と、ボン（生む）という二つの言葉を繋げ合成し、蟹が生む（吐く）泡を命として名付けたものと理解します。「クラムボン」として流れて行くつぶつぶ泡は成長した蟹が吐く大きいもので、子供が吐くぽつぽつ泡はまだ小さくてクラブボンに至らないのでしょう。

水面を〈ぷかぷか〉浮き流される泡。蟹の子供らはこの情景を水の中から、つまり水面の下から見ています。水面の上から見た泡の様子を縦書き表記した〈ぷかぷか〉を、下から読むと「かぷかぷ」になります。「笑っ

た」とは波に揺れる泡の動きを〈笑う〉と捉えたものでしょう。水面下からの蟹目線で捉えた賢治らしい楽しいひらめきの表現と受け取ります。

後半の「十二月」では、「蟹の子供らはもうよほど大きくなりました。」と始まり、「白い柔らかな円石もころがって来小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけらもながれて来てとまりました。」と続きます。子供の守り神である円石、水晶、金雲母が加護のために蟹の子供らの傍に「とまり」、神の恩寵を受けて成長した子蟹の兄弟は、ぽつぽつの泡でなく大きな泡の吐き比べをしています。月光射す水底での成長光景です。「十二月」では「クラムボン」という言葉は一度も記されません。水面を流れゆく泡に付けた虚の命の名は「五月」のものだからです。

そのとき、「トプン」と「天井から落ちてきた黒い円い大きなもの」、やまなしでした。水泳の高飛び込みでは、手の先で開けた小さな水面の穴に体を入れるのを良しとするそうです。「トプン」は、やまなしが、そのように真上から入水した音を捉えた表現だと思われます。２センチ位のやまなしでも子蟹の大きさと同等ですから驚くに値しましょう。やまなしは「木の枝にひっかかってとまり」、「おいしそうだね」という子蟹に父さん蟹は「待て待て、もう二日ばかり待つとね（略）おいしいお酒ができるから、」と言います。円石、水晶、金雲母が流れて来て「とまり」、流れて行くやまなしが「とまり」ます。「とまり」は天意を表す言葉に違いありません。お酒になるやまなしは子蟹の成長を祝う天与のお酒なのです。蟹の父子は、貴石の守りとも、天与の祝い酒とも知らず、物語の読み手だけがそのことを知るのです。

表題の「やまなし」は、命を奪う怖いかはせみと思わせて登場しますが、実は祝福の意を担った果実として掲げた題名でありましょう。梨の原種であるが故に一層物語を深く彩る果実です。言葉が意味するものを知った時、前半後半が響きあい綾なす世界が広がります。絶妙の美しい景色と子供の素直さが溶け合い、父さん蟹の豊かさに包まれます。宝石のような命の物語の幻燈『やまなし』を心の中に読み写しながら、間もなくの五月に誕生する蟹の子たちに思いを馳せたいと思います。

（＊引用は宮沢賢治全集８　ちくま文庫　による。）

特別寄稿

賢治さんに惹かれて歩む暮らし

宮澤賢治センター会員　高橋悌子

私は、岩手県立高校英語教諭として37年間在職し、最後の勤務校は県立杜陵高校でしたが、当高校に於いて、退職後の生き方を決定づける出会いがありました。当時、英語の選択科目「外国事情」の出張講師として授業を担当した岩手大学研究課程在学中の留学生、アメリカ中西部出身の若き賢治研究者・ジョン・ホルト氏がその方でした。彼の最初の授業では、賢治研究の一端を語って貰いましたが、その時の彼の話が私に強い衝撃を与えたのでした。中でも「環境文学」という〝ことば〟が心に刻印されました。彼、曰く、〝全ての生命体は各様に生存維持を目指す存在ですが、こうしたあらゆる生命体に対する畏敬の念を作風として顕著に表わしているのが環境文学なのです。そして、最近、日本文学の研究対象として最も注目されている作家が宮沢賢治ですが、彼の作品にはこの環境文学の作風が最も顕著に具現化されているからです〟と。

その当時の私には、「賢治」は全く無縁の存在でした。いうなれば、アメリカ出身の若き賢治研究者から「賢治」の偉大さ、魅力について、ガツンと一撃を食わされて狼狽したのでした。やがて、退職後の生き様を模索する時期になり、閃いた想いは、〝それではずうっと胸中から離れずに気になっていた賢治作品を本気で読み直して見ようか〟、ということでした。それにはまず、研究環境に身を置くことが先決とばかり、退職後、時を待たずに岩手大学人文社会科学部、地域文化専攻科に在籍。修士論文のテーマは「イーハトーブ童話」収録作品の一つ『鹿踊りのはじまり』の特質～賢治童話と郷土芸能の関係性を含めて～」としました。この作品には6疋の野鹿が現れ、嘉平の落とした手拭の本体検めのための立ち回りをしますが、その仕草が幼年時代、故郷で観た鹿踊りのそれを彷彿させるものでした。そこで賢治も恐らく花巻の鹿踊りを観た記憶をこの作品に反映させたのではという推論を立て、これを実証すべくこのテーマを設定しました。「本作品」は、賢治童話の中でも最高傑作の一つとみなされていて、その魅力は尽きないのですが、中でも注目したのは、賢治独特のオノマトペが頻出することでした。例えば〝はんの木のみどりみぢんの葉の向さ、〈ぢゃらんぢゃらら～ん〉のお日さん懸がる〟〝……五疋はこちらで、〈ことり　ことり〉と頭を振って……〟など。

ところが、修士論文の論考目的は、こうしたオノマトペに焦点を当てて考察するものではなかったため、賢治特有のオノマトペ問題は以後の研究課題として意識化に一時預かりになりました。そこで、改めてこの研究課題に本気で取り組むべく、向かった先は東北大学国際文化研究科、言語コミュニケーション論講座、後期博士課程でした。博士論文テーマは「賢治童話に表出するオノマトペの英訳手法に関する研究」。そして本論文を本課程で４年間在籍して完成させました。その研究手法は次に述べる如きものでした。

まず、当時、入手可能だった賢治童話の英訳32作品をすべて読破しながら、考察基礎資料作成の一環として、短冊形カード１２６１枚を作成。その方法は、カード上面にオノマトペを含む文節を抜き書き、下面にはそれの対応英訳文節を添え書

き。さらに、各オノマトペを仮名行列別に分類したり、語彙レベル毎に分類するなどの一連の資料作成と考察検証を経てまとめるに至りました。

本課程修了後、実感した事は、〝現役時代、賢治作品を自ら英訳するなど、とてもできるはずもないと想っていたが、今ならば何とかやれそうだなあ…〟という心境になっていたことでした。そこでさらに考えた点は、〝重鎮とみなされている英語母語話者の翻訳家が既に英訳済みの賢治作品は置いて、未訳の賢治作品の中でも、特にローカル色の濃い作品を自分の英訳対象として着手して見ようか〟と。

こうした想いの延長上に居るのが今の私なのです。これまでの出版自著は、『日英対訳『イギリス海岸、他4作品／税務署長の冒険、他6作品』』。ヤフー・ブログ掲載済み作品や、目下、掲載更新中の作品『日英対訳『雁の童子』』を含めると20作品余りに及びます。次が高橋ブログの〝URL〟ですが、折を見てご高覧願えるならば幸甚に存じます。

＼＼宮沢賢治～KENJI／／便―Yahoo！ ジオシティーズ
http://book.geocities.yahoo.co.jp/gl/ph6k1jcy

研究課程終了後は、ほとんど毎日、翻訳作業のみの暮らしが続きましたが、やがて人との付き合いが全くない暮らしは不自然で自分を駄目にする、何か突破口はないかと思案する日々が続きました。こうした模索の間に気づいた事は、〝花巻や盛岡にはいわゆる「賢治の会」があるが、水沢区内には未だ賢治研究の受け皿が無い。〟ことでした。〝それなら自分でその受け皿作りをして見たい。〟と志向していた頃、志を同じくする或る方との出会いに恵まれ、早速、2006年11月、『賢治を語る水沢の集い「イサドの会」』を発足させました。

「本会」は以来、定例活動日は毎月21日（賢治の命日）、主会場は後藤伯記念公民館（水沢区）として、参会会員7・8名による賢治作品研究発表や講読、市内外から招いた講師による講話、賢治研究関連DVD（CD）・16ミリ上映視聴、フィールドワークなど、5年間、欠かすことなく例会60回を重ねましたが、諸事情のため、遺憾ながら昨年12月21日を以って解散するに至りました。

顧みますと、「本会」5年間の活動に拠って、水沢周辺の賢治縁の知人からの貴重な資料提供や、生前の賢治を知る方々からの証言などを拝聴したり収集できたことで、当地の賢治研究の推進とネットワーク作りに幾ばくかの貢献が出来たのではと満足しております。

「イサドの会」解散後は、この活動方針を変えて、主に賢治作詞（作曲）の歌唱曲を楽しむサークル、名称も「賢治・歌語りサロン」と変えて、この1月から活動を開始しました。

賢治は全部で21の歌曲を作詞（作曲）する程の音楽マニアでしたから、根っから歌好きの私が自然体で「賢治・歌語りサロン」発足に及んだ次第です。

顧みれば、これまでに賢治作品英訳の傍ら、次の通りの賢治作詞の作曲や歌唱などの自作自演によるDVDやCD制作なども自費製作しております。

＊DVD：日英対訳・脚色『シグナルとシグナレス』～戯曲中の囃し歌の作曲～

＊DVD：『歌語り・命の泉〝雨ニモマケズ〟』～賢治の生涯を脚色、〝雨ニモマケズ〟を英訳・作曲～

＊CD：『告別』（今年1月制作公表）。～悌子ブログで「本CD」の紹介～

この記事のURL:http://blogs.yahoo.co.jp/ph6k1jcy/8045232.html

私の退職後の暮らしは、正に賢治さんに惹かれて今日まで歩んで来たという想いが過ぎります。

これからも自ら楽しみながら賢治さんの魅力を周囲に発信出来るならば、これに勝る悦びはありません。

宮澤賢治センター今後の定例研究会の予定

4月20日（金）話題提供者：開龍美氏（岩手大学人文社会科学部教授）
話　　題：宮沢賢治における「ほんたうのさいはひ」について
―環境思想の問題圏から―

5月18日（金）話題提供者：高橋悌子氏（賢治・歌語りサロン主宰）
話　　題：賢治作品の英訳と歌語りに遊ぶ

6月15日（金）話題提供者：鈴木幸一氏（岩手大学農学部教授）
話　　題：賢治さんの「よーさん」から岩手大の養蚕イノベーションへ

＊この日は、宮澤賢治センターの総会を開催の予定です。

「宮沢賢治ノ青春キャンパス」のご案内

宮澤賢治が卒業した盛岡高等農林学校は、岩手大学農学部の前身です。岩手大学のキャンパスを歩けば、賢治が生きた時代の名残に触れることができます。

ところで、パソコンで賢治の生きた時代をたどれることをご存じですか？ 岩手大学のホームページにリンクされている「まるごとデジタルミュージアム」をまずクリックしてください。

その中で「宮沢賢治ノ青春キャンパス」と題するコンテンツでは、盛岡高等農林学校時代に賢治が参加した文芸同人誌「アザリア」の仲間たちについて紹介しています。

保阪嘉内、河本義行、小菅健吉といった仲間たちは、賢治の人生に大きな影響を与えましたが、このページを読むと賢治在籍当時の風情に触れることができます。

賢治と三人の友人との交友は、世代を超えて現在も続いています。まだ見ていない方はぜひこのページをご覧ください。

宮澤賢治センター入会のご案内と原稿募集のお知らせ

岩手大学では、賢治生誕110年の年である2006年の開学記念日（6月1日）を期して、「宮澤賢治センター」を設立いたしました。

その骨子としては、

① 広く岩手大学における宮澤賢治の関心を集約する

② 組織は学長裁定のNPO的組織とし、趣旨に賛同するする人は誰でも加入できる

③ 設置場所は岩手大学内「百年記念館」とし、日常の連絡先は岩手大学地域連携推進センター（TEL019-621-6672、FAX019-621-6493、Eメールkenji@iwate-u.ac.jp、ホームページhttp://kenji.cg.cis.iwate-u.ac.jp/）とする

④ 会費は当分徴収しないー

などです。

賢治に関心があり、広い意味で岩手大学にご縁のある方であれば、どなたでも歓迎いたします。メールや電話、ファックスで入会申し込みができます。会員の方には、「宮澤賢治センター通信」をお送りしています。

なお、「通信」の次号（第15号）は7月20日発行を予定しています。会員各位の原稿をお待ちいたします。6月末までにメールまたは郵送で、宮澤賢治センターまで送付してください。内容によっては掲載できない場合がありますので、ご了承ください。

宮澤賢治センターでは設立5周年を迎えた昨年、ロゴマークを作りました。作成者はアートフォーラムいわての中島香緒里さんで、宮澤賢治の代表作「雨ニモマケズ」をスタンプに見立て、改めて賢治の想いを多くの人々の心に刻み込みたい。そういう想いで作成したということです。

編集後記

▽巻頭言で記されている通り、望月善次初代代表を引き継いで宮澤賢治センターのために尽力してきた岡田幸助代表が退任し、一年間ウルグアイ共和国に行くことになりました。無事に任務を終えて、またセンターの行事に元気な姿を見せてくれることを切望して送り出したいと思います。

今回の号も充実した内容になりました。定例研究会で東幹夫さんと大野眞男さんが共にエスペラントを取り上げましたが、日本エスペラント学会の会員である私には、個人的にとても興味深い内容でした。1887年にポーランドの眼科医・ザメンホフが人工国際語であるエスペラントを発表して以来、エスペラントは生き続けていますが、今年は125周年を迎えます。

賢治は1922年頃、エスペラントを独習したといわれています。理想郷としての岩手を意味するイーハトーブは、エスペラントをもじったことばです。世界に読者を求めるためにエスペラントを学習した賢治ですが、生前は日本においてさえ読者を獲得できませんでした。死後八十年近い時が流れた今、賢治の作品が世界中に浸透しつつあるのを見ると、不思議な気がします。

（佐藤竜一　記）

宮澤賢治センター通信
○発行
〒020-8551
盛岡市上田四丁目三番五号
電　話　019(621)6672
FAX　019(621)6493
E-mail kenji@iwate-u.ac.jp
HP http://kenji.cg.cis.iwate-u.ac.jp/
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者　岡田幸助
○印刷　杜陵高速印刷株式会社

特別展のご案内

盛岡高等農林学校の教材掛図展3
賢治の「よーさん」から養蚕イノベーションへ

日　　時：平成24年3月9日（金）～平成24年4月22日（日）
10：00～17：00（3月20日は休館）
会　　場：岩手大学図書館1階　アザリアギャラリー（入場無料）
問合せ先：岩手大学図書館　019（621）6082